



第 1 7 号

(毎月1日1回発行)

昭和29年2月1日発行

昭和28年4月17日

第3種郵便物認可

発行所 曙 書 房

定価 一部 20円

りゆうとした背広を着、整った顔かたち、端正な容貌の青年やツンとすまして盛装した令嬢を見る度に、誰もいない部屋では如何なる姿態をとるのかとつい考えてみたくなる。私が自分のそれをハッキリ意識したのは中学二年の春、お風呂の中であつた。妙な罪悪感に襲われながら恐る恐るやはり自然に萌え出る本能には負けてしまった。小学

校六年生の折、友人と組んずはぐれつしながらフザけていた時の接觸と摩擦とが心の奥底にあつたのかもしれない。然し無智な私は病気になつたのかと思つてひどく心配した、私は雑誌のホリホック治療器の宣伝文で、夢

性 歴

我が性の偏執

須 川

勉

精遺精等の文字を知つていたので、広辞林で調べてみた。精液の意味もわかつたが、夢精の説明に、病気の為のようを書いてあつたので、急に頭がボケて廢人になってしまうのかと、ひどく

あられもない姿を見たいと公衆便所のあたりをうろうろした事もあつたが、只美しい女が出入りするのを遠くから眺めるのがやつとであつた。

中学の三年になつて、修学旅行で狭い蒲団の中で同級生と雑魚寝してから、よくその友人の二階へ行つてお互いに悪戯のし合いをしたが、上級学校の受験準備に忙しくなつてからそういった行為も自然に忘れてしまった。柔

道で首を締められる時の快感を覚えてから、入浴の時、濡れた手拭で自分から首を締めて試してみた事があつたが苦しいばかりだつたのと、同じ学校の柔道部の男(確か一級上)が風呂場で

自分で首を締めて死んだ事があつてから恐ろしくなつてやめた。

その頃から卒業する頃迄、若い女性の裸体を窺視したい強い欲望に悩まされた。場末の田舎芝居で、女優の裾がまかれて白い脛が見えたりすると、只その場面を見る為、かぶりつきで一日中ねばつてゐることもあつた。そうして、芝居に出てくるお侠やんな美しい娘を縛り上げて思うさま自由にしてみたい気持ちが湧いて仕方がなかつた。

然し、その頃の慾求は子供が美しい人形を弄びたいという単純なものであつたかも知れない。二十歳の年、遊廓で女を知つてからは、月に四五回はそういう女と接した。そして美しい女を虐めたいという空想はセックスと関連して次第に強まつてきたが、現実はいつも、すれつからしの女から馬鹿にされ、或は輕蔑されて只本能の利己的な満足を求めるだけであつた。

書店には私の気持ちを満足させる書物としてなく、ひたすら自分一人の異常として悩んでいたが奇クを得て、百万の味方を得た如く心強く思つた。



年増女の幻想に悩む

僕は昭和六年一月に生れ、旧制高校を二年で中退し、それ以来ずっと或る官庁に勤務しています。趣味は語学と数学と昆虫採集です。酒とか煙草とかは嫌いです。僕が役所でしている仕事は僕の力の総てを傾けることの出来ない徒らに多忙な、そして無味乾燥な仕事ですが、真面目に忠実に果してゆく事が自分に与えられた義務だと思つて努力しています。

家庭は僕と年とつた母との二人暮らしで、僕は母というよりも、夫が囲碁の師匠という定取のない職業を持つていたために、ずっと家計に辛酸を嘗め盡してきた一人の考婦人をいたわる気持で母に侍っています。そして自分を客観的に見ると、冷笑をうかべながら、こう批評出来るでしょう。——役所では将来を期待される有能で誠実な若手

の公務員であり、家庭では従順で親孝行な一人息子である——と、自己紹介が長くなりましたが、僕を知っている人でも誰も知らない、又誰にも話した事のない自分の「性」に関する回想を綴つてみましょう。

僕は中学校へ上る少し前、自瀆行為を知りました。その時、魔法使いの老婆に縛られて、今にも殺されそうになつてゐる自分を想像していた事を記憶しています。やがて、その加害者が喫煙している年配の婦人に変つたのは、小学校へ上つて友人の家等へ出かける頃だつたと思います。中学二年の時、広辞林の遊女という言葉の説明から交接の事実を知りました。「枕席にはべろ」という言葉がそれ迄抱いていた疑問を氷解しました。この頃から自瀆行為が激しくなり、年配の婦人に苛酷な性交を強制されている自分を想像する

ようになりました。そして年毎にそれが亢進してくるのです。最近はその具體的な姿態等を落書きや時としては、会話等で知るようになって、拍車を加えてきたようです。

僕の幻想の女は——、しどけない風で自分の乳房と太股をかい間見せて立膝で煙草を吸い乍ら、にたにたと笑みを浮かべている厚化粧の年増です。彼女は脂ぎつたネットネットの肌でむれるような女臭を発散し、僕の童貞を弄ぼうと、煙草のヤニ臭い口を近づけてくる……といった空想で、それからは、あらゆる淫靡な行為が彼女と僕の間で行われるのです。

僕はその時の場面を詳細に日記に記載しました。又手記にも書きました。勿論誰にも見せることの出来ない内容のものです。僕はそういった淫靡な空想に身悶えしながらも、まだ一度も女との交りを経験した事はありません。「凡そ女を見て慾情を起す者は云々」の厳しい戒律を奉じていた僕は、内側から盛り上る性の慾望と理性のシレンマに苦しんで居りましたが、昨年暮奇

譚クラブ新年号を書店で手にして激しいショックを受け、恥しさをふるい捨て、それを賣つて帰りました。新年号四十一頁の写真は「美」の一つの新しい分野に違いないと思いました。又、成瀬亮氏の新創雑誌論を真剣な気持ちで読み返しました。二月号も買いました。恐らく三月号も買うでしょう。

僕はなんとしても理想の女性に逢いたいと熱望しました。然し簡単に接する事の出来る職業婦人は二十台の人が殆どのように聞いていますので、僕の歪んだ慾望の対象となる女はいないでしょう。それに第一、金銭で取引するというのは如何にも賤めです。又それは辛抱するとしても一人ではよう行かないでしょう。

僕の理想の女性、あゝ、それは三十五六から四十二三位迄の教養ある中流以上の家庭婦人で、激しい情慾とそれを抑制しようという理性との板挟みで悩んでいるといった人が最もいいのです。どなたか、僕を救つて下さる婦人はありませんか。
(大畑成一)

神の酒に憑かれる

私は元来乱暴者でしたが、どちらかというと割合、潔癖な性質でした。蠅とか虫が一匹お汁の中に落ちていてもそのお汁を絶対口にしようとしないう方だつたのです。それは今でも益々その傾向を強くして居りますが、それでありながら、性的には全く逆な気持を感じる事があるのです。私の特に好感を持つた女性に対する欲求、それは唯、その女性の小水を飲ましてほしいという事です。その女性の排泄物の臭いの泌みたスロース、又は排泄の後始末をしたキレイ紙をいただきたいということ。

そして、これは空想だけの事です。その女性の便器の生活をしたという事です。そしてその気持は、その時、特に好感を持つた女性只一人に対して感ずることであつて、その他にもたとえ美しい美人だと思ふ女性があつたとしても、少しもそうした欲求を感じません。それ故、好きな女性だと思ひながらもたつた一人の女性以外は、こうし

た事を想像してさへ激しい不快感さえ抱きます。

又、たとえ、それが私の求めていた唯一の女性の小水であると云われても私自身がそれをはつきり確認したものでないと、とても不快な気がして飲む気になれません。そして、現在では自分自身のものなど、全く飲んでみようという気持はありません。(幼い時、二回、留守番の時、御飯に自分の小水をかけて食べた記憶があります)

現在、私に小水を飲ませる資格のある人、それは私の妻です。妻以外にも私にこの欲求を感じさせる女性が、常に一名はいる。それは必ずしも一定せず、常に新しく変つてゆきますが、そうした気持を、心の片隅に感じています。しかし、それは機会はなく常に空想の世界の中にだけ生きているものです。

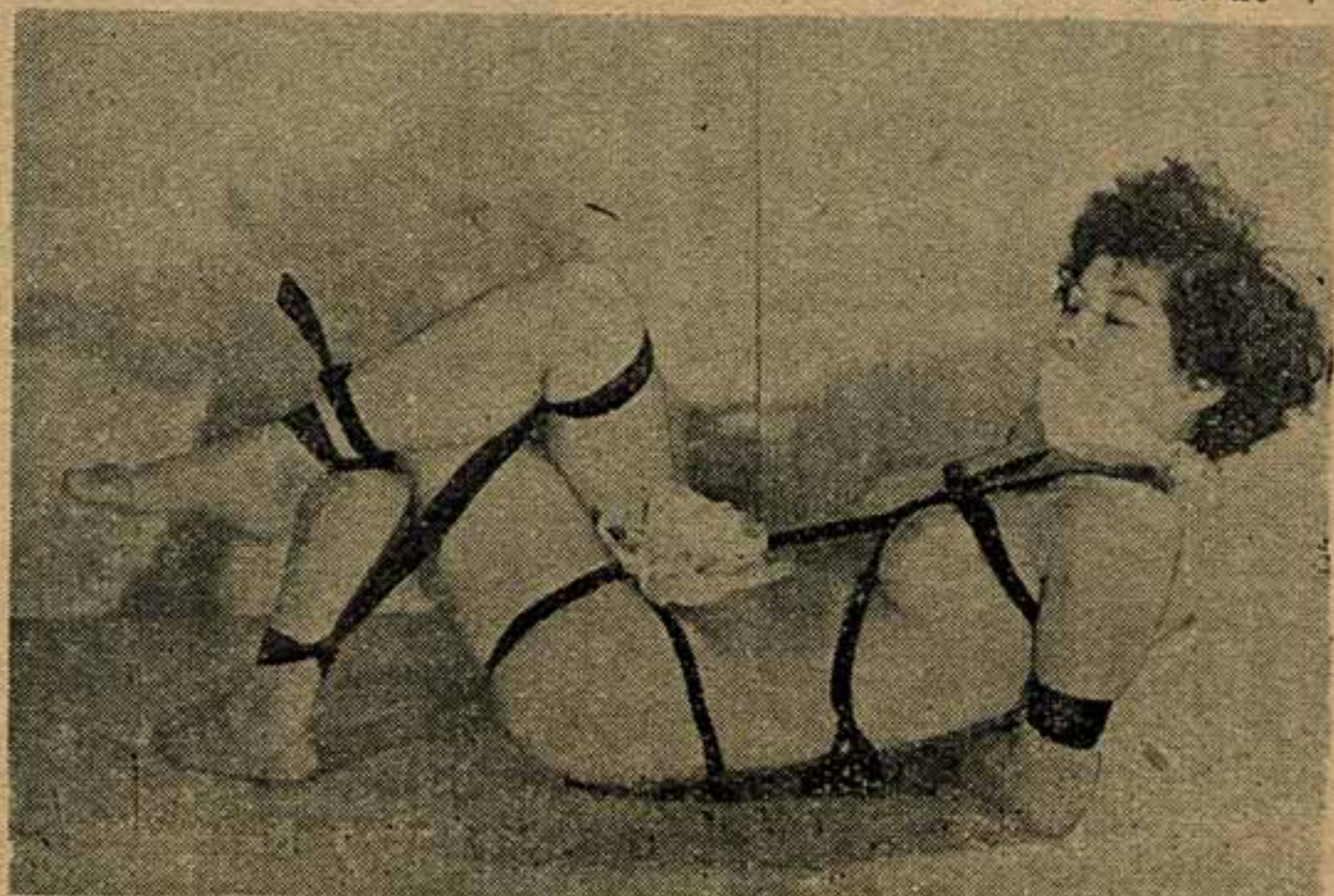
とも角、私のこの欲求を満たしてくれるのは常に妻であり、私はこれを「魅惑の水」と呼んで、既に今日迄百回を遙かに越えてしまつたのです。

私が初めて妻の小水を飲まして貰つ

たのは結婚後、十カ月目でした。前の晩、ようやく妻の許しを得、最初コップに受けて飲むことにしようと思ひましたが、妻が直接の方がいいというので、やつとその翌朝、宿願を達することが出来たのです。その時の私の秘密日記は次の様に記しています。

「……朝四時になつた。妻に起されてから大分経つて私は目をさましたにつこり笑つてすべてが判つてくる……中略……私

はのどをふるわして口中の水を飲み込んだ。またシャツと口中で鳴つた。ゴクリと飲む、シャツと流れはと絶



える。ゴクンと飲み込む、今や目的は達せられた。愛する妻の「魅惑の水」は私の口を通してその体内に躍り狂つ

て流れた。そしてその流れはやがて私の処理する力ではどうにもならぬ程の激しいものになり始めた。……私の微かな記憶にあるあの例の何んともいえない奇妙な味覚が意識されてきた。その味は初めのうちは素晴らしい魅力であるが、その量の増す程うま味を増すものではなかった。五回、六回、私は口を閉じて止めた。妻の生理は七、八分目は終つたろう。「まさかつたでしよ

う」という妻の言葉に対して、私は「ウ、ウ」とあいまいに返事しながら私は少し胸の苦しいのをおぼえていた。もつとも、これは最初からうまいというのではない筈である。うまいというよりは、どうにもならない誘惑の酒である。

「もういゝでしよう。これからよしませうね」私はまた「ウウン」と意味のわからない返事をした。私は四五

時間を過ぎてから、それが其のように中毒性のあやしい魔力を持った忘れがたい欲望であるとの印象をはつきり掴んだ。

—以上原文ノマ、ト

そうして、こうした方法で私は其の後何回となく続けてきたのです。平均すると十日毎に一回という計算になります。夕朝から晩まで一昼夜、全部妻の小水を口に受けた事も三回もあります。こうした事は妻に対する激し

自分の閨房生活をあからさまにする

という事は大変申し上げにくい事です。が御参考の一端にもと、私達の場合を公開しましょう。私に限らず、殆どの男性は、若い女性、特に肉体的に魅力を持った女性を思う儘にしてみたいという気持が動くものです。私もお多分に洩れず、電車に乗つていても、道を歩いていても、若い豊満な肉体の女、特に美しく着飾つて澄ました女に逢うと、飛びついて服をはぎ取り、公衆の面前で素裸にして羞しめてやりたいと思います。しかし、これは思うだけで実際には行う事は出来ません。

い愛情が湧いた時でなければ行いません。そして、これは又、女に対する私の愛のパロメーターにもなるのです。

私は一つこの小水に対する生理的な問題についてとても心配なのです。何故なら家庭や女性に対して極めてマゾヒズム的な私は、一旦外へ飛び出せば激しい活動家でなければならぬと信じているからです。勤め先でペコペコ頭を下げて叱られてばかりいて、家へ帰つてはサディズムで女を虐げるといつた在り方には憤りを感じます。

こうして外部で活躍しようとする意慾に対して、妻の小水が私の肉体を蝕んでいるのではないかという危惧です。然し私にとつてこの「魅惑の水」の誘惑を克服する事が出来そうにもありません。現在私は別にこうした行為によつて肉体的に異常は感じておりません。只酒が弱くなつてきたという事です。酒が飲みたくなると酒のかわりに魅惑の水を飲んでる中に、酒に対する魅力が薄れ次第に酒が弱くなり、口にするだけで嫌になり出してきていくのです。これはどのような理由があるのか、自分自身でも不思議に思つていくところなのです。

(京都・淡田生)

異常性愛テクニック

山口 晴 行

性愛技巧について、戦後各種多様な本が出盡した感があります。どれも、あゝせよ、こうせよと、微に入り細を穿つて説明していますが、徒らに煩瑣であつたり実行不可能であつたり、又新婚時代で何もわからないうちなら鬼も角、手練手管も出し盡して、新しさを求めるようになってくると、味気なく思い出してくるものです。

これが所謂、倦怠期というものか知

れませんが、この所を夫婦二人で理解し合つたならば新しい途が拓けてくると思えます。夫婦生活は夫婦だけの営みであり、それがどのように行われようとも、社会公共の秩序に反する事はない筈です。離婚の原因の大多数は夫婦生活がうまく行われない所に発する悲劇だと云われますが、楽しい性の相和を得ている夫婦には、生きる喜びのみが現れています。

そこで、私は家庭に

於いては、妻を出来るだけ美しく着飾らしておいて、突然引き倒し着物であれば帯を解き洋服であればスカートを剥ぐのです。これはまア前戯的なもので最初の中は此の程度で十分満足していました。

然し妻が只受身で応じていたのはせいせい新婚半年位で、それから以後は妻にも積極的に抵抗させるようになりこの夫婦相互で行うテクニクは益々円熟してきました。自分だけの妻、自分だけの夫、であるとするれば愛の饗宴は飽くことを知らぬ深さで耽溺してゆきます

正常なる行為を淡白なものとするれば異常性愛は甘美な濃厚さを持つています。妻の肉体を縛りつけるのも、又その日の体位も、すべて最初の格闘の際妻が私の耳に耳うちするのです。椅子



とか柱とかと其の他、いろいろの小道具も用います。紐という仲介物は思わぬ姿勢で妻の肉体を保持することも出来るのです。私の説明が不十分なため私達二人が、どんな悦楽に酔つて新婚時代を過したかという事を承知して頂けないのが残念ですが、最後に私は一つ提案をしたいのです。

と思ひます。

勿論、私の妻も最初はそんな態度は露程も見せなかつたのですが、私を愛してくれていたので、私のやる事に迎合してくれたのかも知れません。今では私はこの妻でなければ、と打ち込む程私の気持ちにびつたりしています。そして今後、更に二人で変つた境地を見つけることが出来ると思ひます。

(数久操画)

よくマゾの女性とかサドの女性を求めていられる人を見受けますが、徒らに手をつかねてお膳に坐つていても御馳走は参りません。それだけの努力をしないことには、それだけの美酒はもたらせられないでしょう。例をマゾの女性にとれば、そういった素質をよし持った人であるとしても自分からマゾであると云う人は、すでに過去に於いて誰かに啓蒙された人であると思ひます。サドの女性にしてもそういう事が云え

アフ街・トピツク

○十七才と十九才の娘さんが、腹切り自殺を遂げ、一件は未遂、一件は死亡との新聞報道があつたと読者から報告を頂いた。やはりそういう娘さんもあるのですね。

○公衆便所覗きを専門にやつていた十六になる少年が、淋菌のために片眼失明したという記事を赤新聞で見たが、何かのネタになりませんか。

○切手の蒐集等は罪はないが、同じ蒐集マニアでも百貨店に大小さまざまのコケシ人形を陳列してある前で年頃女学生がわいわい騒いでいるのを見ると一寸奇異な感がある。と或る紳士が言っていた。皆様如何？

○ビルの屋上から飛び降り自殺を遂げた二十二才の青年があつた。それから急にそれを真似た飛び降り自殺が二、三続いた。そしていつも写真入りで詳細な記事を載せた。同じ自殺するのなら自分の屍体を写真入りで新聞に載せて貰つて万人の眼に觸れたい。という志願者が増えるかもしれない。



憧 憬

井上 賢

(古い日記から)

小学校五六年の頃、譚海で山椒太夫の物語を読んだとき、後手猿轡の稚児姿の少年を、海賊風の大男が後から細目をくつと掴んでいる挿画があつた。妙にはつきり頭に残っている。

大正九年二月(高等科一年)の日記に「天満俱樂部へ行つた。旧劇は源頼光の大江山鬼退治。くもの忍術があつた」と書いている。それには都からさらわれてきた姫が、大きな組板の上に両手を縛りつけられ、山賊が刃物を振り上げているところがあつた。翌年十一月の「彌次喜多金比羅詣りの巻」では、旅の娘が船底に後手猿轡で監禁されていた。また日は忘れたが御家騒動のような旧劇で、殿の寵愛を側女に奪われた奥方が、嫉妬のあまり奥女中数名と共に、女を庭前に引き出し、荒縄

で後手に縛り上げ、よつてたかつて責め立てる。其の頃女優はなく、たしか片岡長正という女形であつたと思うが突かれ叩かれ、或は締め上げられて苦しむ姿は艶になまめかしく、子供乍ら心に強く焼きつけられた。

当時の旧劇は大体歌舞伎や講談の映画化が多く、道中姿の娘が悪者にかどわかされたり、可愛さ余つて憎さが百倍と、美しい女が責められたりするの常套手段で、縛られる女は今のものよりずっと多かつた。初めは男女とも善い方が苦しめられているときは、はらはら気をもんでいたが、いつの間にか美しい女の場合だけとなり、それも後手に縛られた賣場となれば、いつも異常に興奮を覚えるようになった。

隅外の「キタ、セクスアリス」には十四才の頃、寄宿舎生活の作者が、先

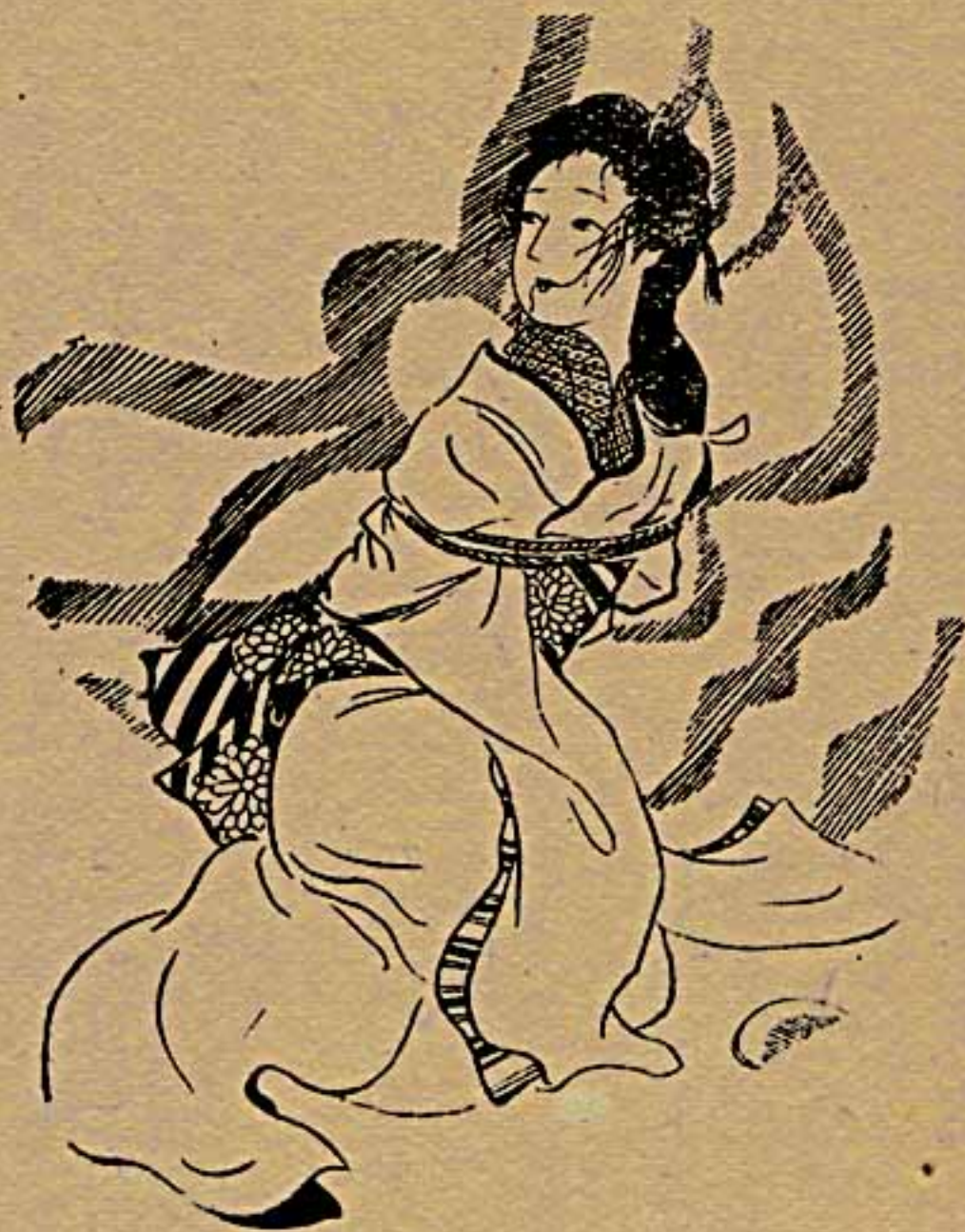
輩が少年をからかう言葉に刺戟されて悪いことを覚えた、巧妙な筆で書かれている。私はそんな刺戟を受けた記憶は無くて、映画だけの影響によるらしい。大正十一年三月に見た連続大活劇「強力エルモ」に、悪漢の巢窟へ誘拐された令嬢が、ロープでグルグル巻にされ、ベッドにころがされた場面があつて、それを見たときには、今迄にないものがあつたように憶えている。

一方読物の方では、講談雑誌や講談本をよく読んでいたが、長編講談田宮坊太郎や曾呂利新左衛門に魅力的な面があつて、特に後者には、小姓風の美女が後手で吊り下げられているのを簡素な線で綺麗に描かれていた。其の他そんなものが、いつの間にか沢山たまつたが、当時の私にとつての肝巻は、講談雑誌の「番町皿屋敷」の挿画で、井戸に吊り下げられたお菊を、斜め後より描いたもの。井戸繩を背に、後手にされ、荒縄は胸のあたりをたがのようにつまみ、手首に痛ましく喰ひこむ、髪を乱して怨めしげに振り返つた妖艶な姿。薄い紙で写し描き乍ら、あたか

も自分がお菊を縛り、責め上げているような錯覚に落ちつゝ、陶酔の境に入つていった。

大正十二年春道頓堀に洋画封切場として、松竹座が開館した。第一週の獨映画「フアラオの恋」も良かったが、同時上演の舞踊「アルルの女」で脚線美にひかれたことを日記に残している。其の頃から楽しみは暗い所以外に発展しているらしい。千日前には敷島俱樂部、映画俱樂部等洋画上映館があつたが、松竹座は松木、里見等の名解説者と、充実したオーケストラを擁して、映画の殿堂として君臨していた。私には映画も映画だが、他ではあまりやつていないアトラクションにひかれて、小遣金を貯めては通つていた。いつも立派なニュースを呉れて沢山たまつたが、子供が大きくなるにつれ、そんなものを見付かつては親の威厳にかゝわると全部焼いてしまつたが、惜しまれてならない。いま当時の日記を読んで見ると、随分映画に行つており、いきおい友達はお派手の方に多く、バレンチ

ノだの、ケロリアスワンソン等とわいわい騒いでいた。友人の中では、一年(商業学校)からずつと一緒だった山本君を思い出す。姉さんばかりの末っ子で、あまやかされていたためか性格が女性的で所謂稚児さんにと大分硬派から眼をつけられていたらしい。一寸そんなことを口にしたこともある。思いついても可笑しいのは、四年のとき人間は自然に性的成長をするという話から、彼に「絶海の孤島に二人だけ残された男の子と女の子は、他人の影響を受けないと思うが、それでも性に目さめるか」と愚問を発したことがある。どうも総てに遅れていて、社会に出てからも皆について行けない。同僚が彼女にラブしたと言うのを聞いては、どんなであろうか、カルピスの味に似ているというが(当時の広告文句)。あそこへ遊びに行つたが、早く済んで呆気無かつたという話には、色々妄想をたくましくする。ある日役所で給仕が十円札を拾い、裏を見れば美事な秘戯の図が描かれていた。皆とり合いで廻覧したが、羞ずかしくよく見もせず



次へ廻してつた。

内気で消極的、且純潔派だから結婚当座はまごついた。相手も処女、両方無経験では巧くゆく筈は無い。あれやこれや川柳を思い浮かべ、俗謡にヒントを求め、やつさもつさやつていろいろに、案ずるより生むは易し、どうにかなるものである。光陰矢の如く、そのうち一男を儲け、その成長を楽しみ乍ら荏苒茲に二十年、四十台も既にな

かばを過ぎ、伴がこの記事を読んだりしてはと心配する齡となつた。

昨夏本誌上で諸兄弟姉妹の体験を読み、初めて同好の士の多数存在を知つて自信を高め、且幾多の示唆を得て、大いに血をたぎらしている。暗い中で二人だけのとき、荒縄で縛々と縛られた羞恥におのゝく真裸の女を想像する、この想像的サチズムの線に留まつていた

が、その線を越えることは相手の理解と協力を必要とするだけに、中々緒口をつかむことはむづかしい。

が遂に曙光を見出した。いつか京都の新京極へ出て大倉千代子劇団の「吉田御殿」を見たとき隠密を見破られた奥女中を捕えて、帯を解き、着物を剥ぎ、真赤な長襦袢迄ひきむしつて、桃色の腰巻一つ、両手を高く吊り上げての責め折檻、度胆を抜かれ、固唾を飲み、只その妖しく美しい責場に酔うばかり、その驚きを或る夜、酒の勢で実演入りで説明したのが、狭い突破口となつた。それらのことは御想像に任ずるとして、未だ日も浅く、そう色々なことは出来ない。誌上で色々述べられている世界には、多大の憧憬と美望を抱いている。「このことは美の域を脱してはいけぬ相手の苦痛は嫌悪に通じ興味を減殺する」を信条として、兎角亢進したがちな衝動を抑えているが、あゝ如何せん、より高度への憧憬は禁じ得ない。

ボクの責め方

(九)

宝塚二三夫



(第十二号より暫く中絶してしました、再びお目見えします)

ボクが常日頃から愛着する性的女貴とコスチュームの対照、ボクはこれを責とコスチューム・ブレーと云っている。その場合、いつでも、どこでも楽しめる相手はやはり玄人女であり、浮草娘である。特にダンサー、レヴユガール、マヌカン系がよく、同じ玄人筋

でも一流芸妓以外、不見転、やとな類に至つては時と場合で変化が甚だしく予告でもない限り、やはり新しい女に落着くわけで、勿論完璧令嬢は亦格別であり、世間の士人達が口にする「おジョーサン族」とはハッキリ区別して頂きたい。

それに次ぐものは職域を判然としたコスチュームも亦、絶好が実に多い。

このコスチューム・ブレーにも春夏秋冬の別による効果の%もあるが、ボクの実見体験を一応列べる。先ず今迄ボクの脳裏から一步も退かぬもの、それはオーバーの着用例、冬を基準とす。これから例を挙げる個々に、カメラに入れたものを挿入すべきだが、ボクの書く総ての相手は二、三の歿故者以外皆現存中であるので、発表はたとえ背

面でも人権、人格上(ボクとプライベートでない限り)羅列は不可能である事が何より残念。然しボクの言動があくまで事実であり、可能範囲内の行動である実証のため最も支障のない写真を一、二披露する。ポーズ、シーン等参照されたい。

7、美代子(銀行員20才)

この娘はボクの事務所の本通りに面した、取引D銀行のLS課の事務員でありボクの事務所へ有証や帳尻引合に来る娘である。美人ではないがガツチリした君江型、小麦色の肌、健康美とほめて云うとそれ丈。ボクにしてみるとボクが手ならした譜代にあらず外様大名の因縁のない方面から、それもマジメ一方のもので、F食堂のお茶一杯から攻め始めて二ヶ月目位、食堂の君江等もろもろ族を動員不能の立場からいささか困難だった。十一月紅葉狩も終るし小寒い土曜の午後二ダイビンクと誘出し、S遊園の奥ゴルフリンクすぐ閉鎖とは知りつゝの一芝居、リンク背面の丘の上へ車を廻して彼女の安心感を考慮して芝生の上へ乗り上げて

人影もない広漠地帯、斜陽一杯に受けて一休み……。又またこうした描き方をしていると二人百枚の長談義が始まりそうなので、早速賣場にかゝる。丘上に車のフロントを乗上げて前の樹立（この間の風景は写真で諒承されたい）へダークな鼠色のオーバーに跣足、



伊呂波仁補遺抄

新 年 号

（五四頁上段二〇行目）由貴子の股は辰次の口と鼻の上にピッタリ重つた。失神する程の歡喜に辰次の胸がふるえる「どう？ いゝ氣持でしょう？ 光枝と較べて如何？」由貴子はたのしそくに体を前後左右にゆすつた。辰次は女の

不味く見えるので、「爪先を揃えよ」「ひざ頭を引付けよ」と命令すると腓脛が十分美しい肉感的な線を表現するものだ。初め下手なものや不慣れの女はこの美代子の様に両足の親指を丁度頭につけていた赤いテープリボンで括り合して歩行の自由も奪つて後方に立たす。「フフフツ……」と唇かしさといさゝか悪さと順応とをかねた笑聲を一声出す丈である。彼女への責はこの程度でよいのであつて脚一本にしる味

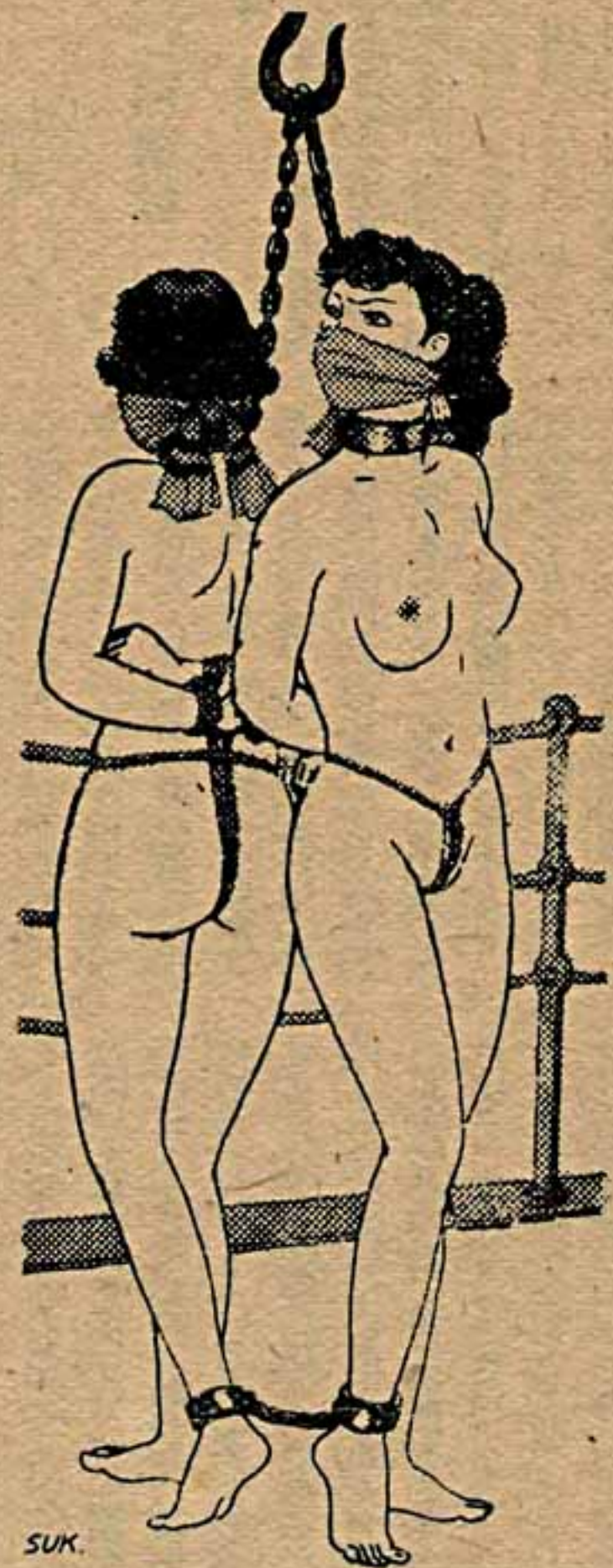
匂いにむせた。鼻孔と口に密着した女の肉の奥からやがて醗酵とした分泌液が滲みでる。辰次は舌をできるだけ長くのばし、必死になつて秘密の肉をベロベロとさぐつた。由貴子の眼が細くなり、眼ぶたと頬のあたりが薄紅に染つてくる。と思う間に豊香の液体がタラ／＼と男の鼻、口、顎に流れはじめた。辰次の眼の前の牛乳のような真白い下腹が波をうち、俯向いた由貴子の熱い息が辰次の額にハアハアかゝる。女の額にもうつすらと汗が光りはじめた。そして、その興奮が最高潮に達し

うべきものでなく弄ぶべき肌でもないそのくせ色々と利用法はある（後章の点景によく出てくる）そうした罰として立たしたガツチリした跣足の踵が土とか砂利にめり込む様な感じがとてもボクの目を楽しめますこと何ヶ月、彼女はこうされる事が何かボクへの奉仕と思つていたのであるか、それとも女性特有の被虐心理の何%かはあるのであろうか「こゝで立たされてみるか？」と云うと「こゝでフフフツ……」と

た時、辰次の鼻と口を襲つた軟い肉の間から、今度は黄色いあた／＼かい液体が勢よくほとばしりだした。辰次はあわて、口を開けてそのあた／＼かい水を受けける。それは口を開けただけで咽喉の奥にぶつかると程の勢であつた。放射される際のシャ／＼というところよい音が父もや辰次を陶酔に誘うのである。液体はすぐ奴隸の口に満ち溢れた。頬から耳を伝わつて、更に首筋から床へ流れ出る。由貴子は上着のポケットから上質のチリ紙を出すと、ゆつくりと濡れた箇所を拭いた。（五八頁上段四行

すぐ跣足になり縄をかけなくても自分でシツカリ背中を手首を組合して握りしめ爪先も云ない先に揃えて立つ様になり、S公園の頂上Mのそれ、H海浜H神苑の池の石の上等々、場所によつては「誰か来るワ」とあわてる事もあり、そうかと思つと「ことなら括らはずとも……」と云う美代子、遂にボクのキッスを受けると「くくられるより苦しいワフフフ……」とうめく。さて正月の散華、それは殆んどこの筆を紙面に汚すほどの賣場もない平凡なものであつた。その頃でも後手、ハダシの佇立責は続けられ「つめたくないか」と云うと、「チツトわネエ」と辛抱出来る云う恰好。その頃から女になつた美代子のセリフ廻しが単的になつて前述のお株スタイルで石の上にも立たすと、「おなかまで冷え込んで来るわ、こまるのはあんたでしょうフフツ……」そして節分頃に彼女のキビスにひび割れが出来て来て、こうなるとたくましく美味そうな足も全く艶消しでこのテーマも自然消滅になつてゆくわけ。さてお次はBホールのダンサー。

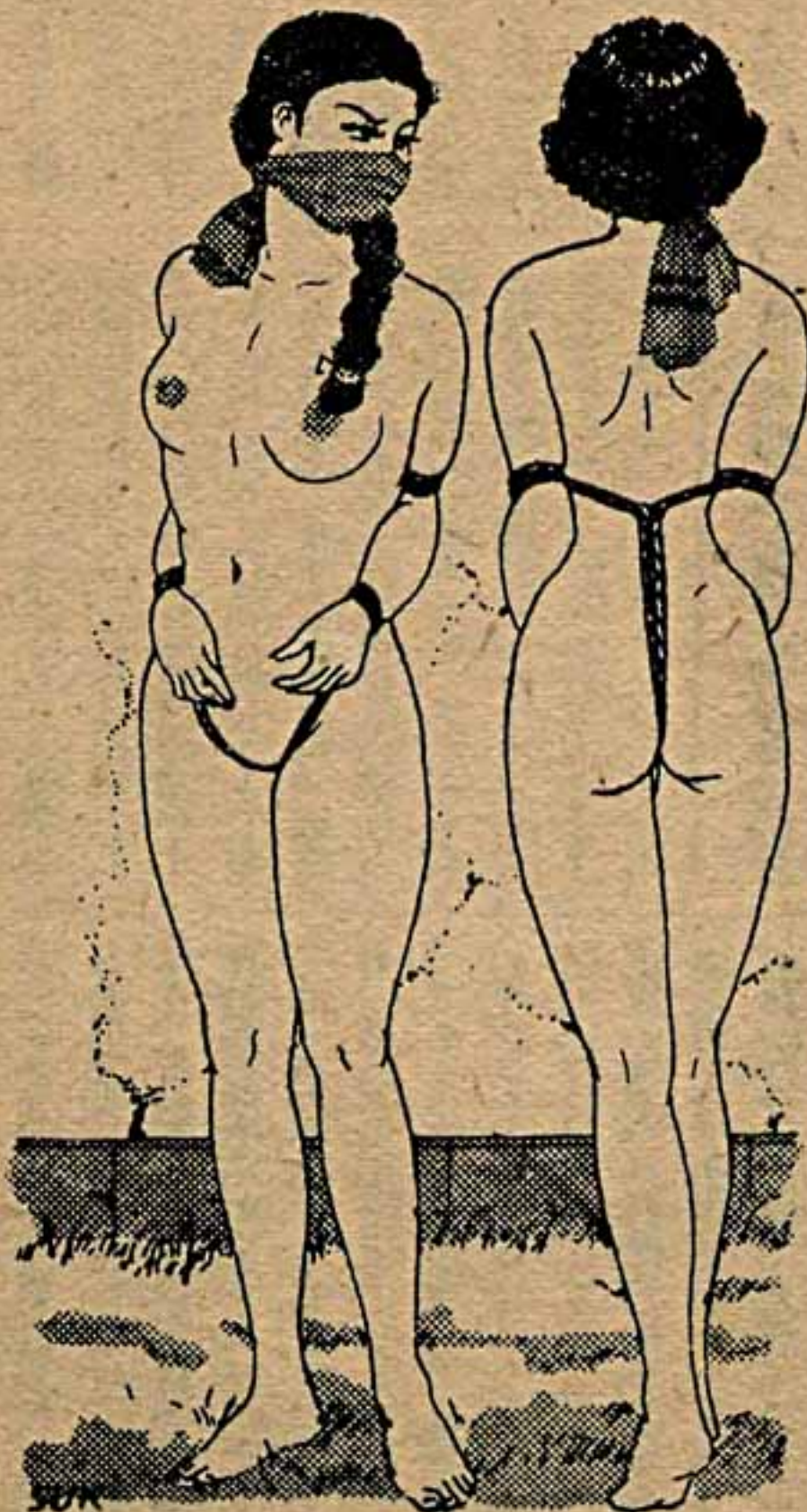
数久操習作画



絵の説明

(右) この繪は腰紐が
すぐにも切れそうです
が、切るにはかなりの
刺戟を覚悟せねばなり
ません。しかも切った
処で自由にはなれない
のです。

(左) この繪は手が傍
まで行つていながら彼
う事も防ぐ事も出来ず
始末の悪いところを狙
いました。



した。(四七頁一段十行八字目) 男
の手出しへの。(四九頁一段十六行
目へ) ブロースの下に滑り込む指、そ
して血に濡れた男の指は既に濡れ盡し
た女の最後の場所にもぐり込んだ。(一
二行おいて) 絶え間ないエクスタシー
に身体は綿のように疲れていた。血に
濡れた毛を分けて男の指は執拗に秘密
の肉をもてあそぶ、あゝ男の慾情はな
をも女の肉の痒癢を強いるのか稲妻の
ような恍惚感と共に私は氣を失つてい

目) 恥毛をひ(同五行目) 指を愛液に
濡ら(百頁下段二行目) そうそうい
ゝよいゝよ(一二六頁上段三行目) 太
もゝまで一ぱいにさける程拵(同九行
目) のピンとを合せ(同二行目) 一
条の水線となり弧を描くと一七九頁
上段一八行目) 律動的運動にうつゝ、

二月号

(四六頁三段一五行目) 男の指が私の
指をまさぐつた。(四七頁一段四行目
と五行目の間へ) 失心するような陶酔
彼の舌が私の唇の間から蛇のように口
へ侵入してくる。私の舌もそれに觸れ
た。口のなかに異性の軟かい肉が充満

た。(六六頁一段一行十六字目)我が身を操る(九〇頁二段十一行目)バンドが風を切つて鳴る度に私の意識が次第にかすんでゆきます。(九〇頁一段十三行四字目へ)二人の身を一つにするよう(九三頁一段五行二六行目)そして一種獨特の臭いがします。(九三頁一段二十行目の次)「さては昨夜すぎたんだな、櫻井の顔色が悪いぞ、ハ、ハ、ハ」「いえ、その、どうも、へ、へ、へ」(一〇三頁三段二十行十二字目へ)私は彼女の手を発見した。恥毛が強く引かれたからだ、彼女の手の指はいつの間にか私の体内に深く入つていたのだ。このように気づくと私は危く気が遠くなりそうになつた。(一〇四頁一段十四行目)しのぶは舌で恥毛を分けて私を操つた。そうだ、私を操つている。(二行おいて)彼女の唇は時々私の軟い肉をくわえて吸つた(同頁二段七行目)もう濡れきつた私の肉体の一番深いところへ吸いついて(一〇五頁二段五行目)「気持ちよさそうね、指じや物足らないんじゃない?もつと太いのを入れてやるわ」(同頁同段八

行八字目へ)のもの(一〇六頁二段十行二字目へ)ローソクが手荒く押し込まれ、(同じく二二三行六字目へ)チリチリと毛がみんな燃えて、それでも消えないところがふさがつてしまつたろうな(同頁三段十行目)幸い私は毛深かつたので直接股は焼かれなかつたが、それでも、(同じく十七行九字目)ローソクを引き出すこと、これはとても出来そうもないのであきらめて(一〇七頁一段七行十二字目)しかし恥部にはローソクが差し込まれ立っている。(同じく二段八行九字目)ローソクを引き抜き、毛についたローソクを落してから(一〇三頁二段四行目)随分濡れてしまつただけと、三木ときたら夢中なのよ、(次の行へ)「どうだい、いゝ気持ちだつたかい?」「え、とても」「それから?」「三木は眼をつぶつて、顔を真赤にして無念無想の形相なのよ、妾汗で大変なのよでタオルで妾の汗を拭いて自分の顔の汗も拭いて、その時智恵子が外から帰つてきたんでやめたの」(一〇二頁二段十一行の……、私、の次へ)のあれ。



(三月号の分はKK十八号へ)

【短 信 住 来】

○読者から送つて来られる多数の責めのアイディアの中には、陰毛をはつきり書いて来られるのが多い。その部分を極めてリアルにしかも実物そっくりに描いているのには感心する。

○「男女下ばきコンクール」のアイデ

イア、女は腰巻からパンティ、ブリーフ、バタフライ、男は猿又から、六尺越中、前合せ褌、水泳型の三角褌、型色、模様とりどり、これを着用した写真。というのだが、これが完成され、は一つの威嚇であろう。

○岡田甫氏篇 新川柳末摘花、有光書房発行、定価三百円の贈呈を受けた。これは「夫婦生活」誌上の読者川柳コンクール応募作品及び「近世庸民文化」の応募句の中から選んだものである

或る富豪の告白

マゾヒスト誕生 (七)

峰村佐吉

人間の心の不思議さというものを私はしみじみと考えさせられました。

津矢子に熱中している時は、彼女の不行跡に対しては殺しても飽き足りない程の憎悪を感じ(勿論私は直接手を下

して殺したり傷けたりするようなバカな手段はとりませんでした。もつと効

果のある自分自身にとつても愉快な方法を用いたのですが、ていまたのに

その復讐の手段として知りあつた美佐子という女とのかりそめの生活を持つ

てからは、津矢子の事も忘れた様に興味をさめていました。

マゾヒストとして完成されつゝある妻の津矢子に対する倦怠感、所詮、男

は何んでもさせる女に対しては興味を失つてゆくという我儕者でしかなかつ

たのです。若し、私が津矢子を完全に飽いてしまつたとしても、いつでも離

婚を申立てることの出来る立派な理由

があります。その切札を持つているという気持の余裕が、私をして彼女を悠々

と手元へ置かしめたのです。何処へ行つても、朝から晩迄御機嫌

とりにはばかり聞かれています。たまには無礼を働くような対象に逢つてみたい

という警戒心が起きてきます。美佐子

はこういつた人心の機微をわきまえて

いる程賢明な女ではなかつたようですが、一時私の心を完全に掴んでしまつ

たという奢り心から、一旦酒席に入つてしまつと、まるで私を子供のように

扱うのです。前に彼女に世話女房じみた心配りをすると書きましたが、次第

にそれが、すべての点で私を支配しようという積極的な意欲で、或る時は私を按摩してやるといふ口実の下に、ベツトの上に腹這いになつた私の腰の上

から背中迄、足で踏みまくつて、とど

のつまり、頸を両股で巻いて締めつけたりしました。

私は、はつきり妻のある事は勿論云つては居りませんが、私の服装や年輩

からして、子供の二、三人はあると思つて

いるのでしよう。そういった家庭というものに対する強い反発心が、私の

肉体そのものに対して、激しく火花を散らしていたのかも知れません。この頃に至つて、私は初めて、この女こそ、私の計画を実行に移すのに最も適

した女だと信じるようになりました。男として、女性に対して最も不徳とする事さ

え敢て行ふ無神経な動物になり下つていた私は、朝、昼、晩と交つた三人の女に接して、その異つた肉

体と比較して、ひそかにほくそ笑んだりしました。そして、私は津矢子に対し

ての精神的な苛責を加える手段としてより以上に、サディズムと混合した露

出症的な意欲に心を燃え立たせました露出症的な男性は、多分にマゾ的傾向

を持つていようでしたが、私の相手を凌辱する気持が主だつたのですか

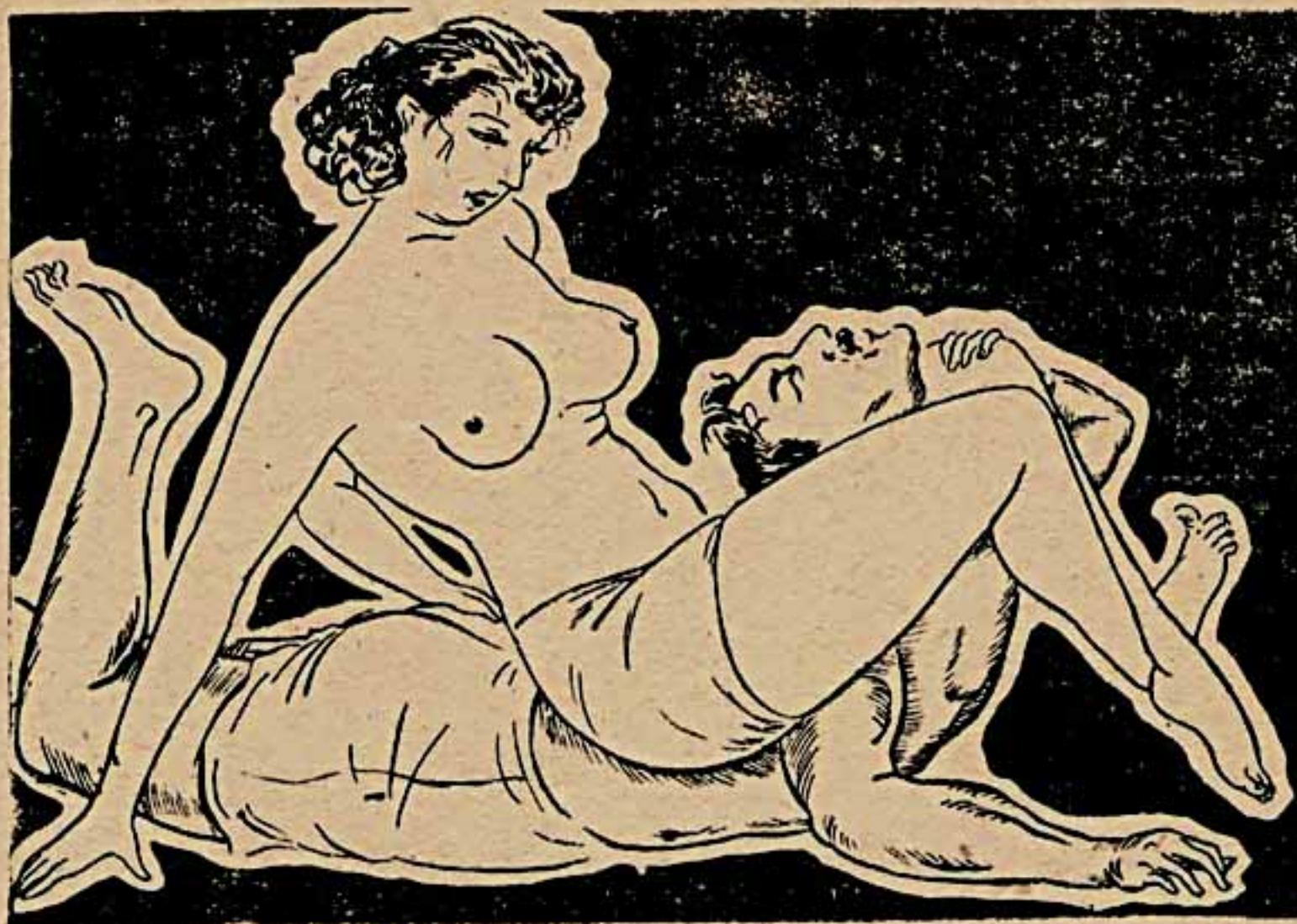
ら、サディスティックなものです。若し人妻をその夫の前で姦したとしたら、どうでしょう。そういった場合を想像するだけでも、私の心は快哉を叫んでいました。

嘗て、私は行きつけの待合で、十四になる芸妓の卵を、女将に頼んで無理に「雨しよば」を踊らせた事がありました。踊りそのものには、何の興味もなかつたのですが、女将の困つてうろする顔、明輩にそんな踊りを見せることに強い羞恥を感じて躊躇する小娘金という手枷でそのすべてを打破する所に私はたまらない優越感を覚えると同時に、そのあとで年増芸妓が「そんなに見たければ私のを見せてあげるわ」と云つて、これ見よがしの露骨な踊りを始めた時、私は目の前の盃をその女に投げつけていました。それは女将のとりなしで、冗談のようにされてしまいましたが、私の心の中は殴りつけてやりたいような怒りに燃えていたのです。

暫しの酒宴の後、隣室へ五人の芸妓を連れ込んで雑魚寝した時は、私の征

服慾と露出欲とは十二分に果され、久しぶりに爽快な気持ちで帰途につきましたがそれから二度とそのお茶屋へ足を運ばなかった私の気持ちもわかつて頂けると思います。

まだまだ、私の悪徳を書き続けねばきりがありませんし、それは大なり小なり皆様も御経験された事と思ひ省略いたしますが、とにかく、私がこういった遊びを金にあかしてやつていても良心の苛責をいさゝかも感じなかつたという事は、妻である津矢子の不行跡の賜でした。大逆無道の云々い方ですが、私は他で多くの女を征服している時でも家で一人で待つてゐるだらう津矢子の事を思い出して心の中では「ざましろ」と叫んでいました。そして、時折、ふつ、と私の脳裏の片隅をよぎる暗雲、「若しかした



ら、誰か男でも、俺の留守に来てやしまいか」そんな嫉妬の念が、私のサデイスチックな気持ちに迫車をかけるので

した。

さんさん、方々を遊び廻つて帰つてきてからでも、私は何の反省や抵抗もなく津矢子を縛つたり、殴つたりしました。いや、それ以外に殊更、出来もしない難題をふつけて困らしたりしました。お恥しい話ですが、妻と私の夜の生活では緊縛というものが切り離せないものになつていたので、緊縛によるその行為、それは世の如何なる人も及びもつかない体位迄可能とさせるのです。苦し事情が許すならば、私は参考迄にその時の私の気持ちを申し述べたい位です。

正常だつた私を、この様なアブノーマルな男にしたのは、誰か、決して私自身の罪ではない、すべて津矢子の罪なのだ。もうすでにマゾヒストは誕生してしまつた。——そう自分の心に言いき

かせて、時々暗雲のように、頭の上に掩いかぶさつてくる自己嫌惡の心を払いのけています。

如何に豪華なホテルのベッドであつても、それが、ホテルに限られる逢瀬であつてみれば、佇しい思いがするのは当然です。逢う度に多額の援助名目の金銭的報酬の外に、身廻り品等も惜しげもなく買つて貰える美佐子ではありましたが、満つれば欠くのとえ、一軒、家を持たせて欲しいという要求を持ち出してきたのです。柔かい肌、撓やかな肢体、それにも増して余すところなく知りつくした閨房のテクニク、私は今、この女を手放したくない気持ちで一杯でした。

前にも申しましたように、私は別に二号とも三号ともつかない女を二人、半ば公然の様に囲つておりました。お多分に洩れず二人共、水商売上りの商売のお妾でしたので、私が一週間も一度も顔を見せなかつたつて、殊更嫉妬じみた事を云つて私を手とすらす様なこともありませんでした。それは私の与えてやつた店が忙しいというせいもある

りました。私は苦し彼女達が余りうるさい事を言うのなら手を切つてやつてもよいと思う位、女自体には特別の魅力を持つてゐるわけではなかつたので

すが、経営させてゐる小料理屋とスタンドは不思議にも繁昌してゐたので、私としても経済的に援助してやる必要もなく、会社の支出で当然やれる宴会等もそこへ転げ込む事がよくありました。少くとも私のお蔭で立派な店の女主人になれたわけですから、私の客となれば、献身的にサービス此れ努めるのでした。そうして内心はわからないとしても、表面だけは極めて袖妙でさえありました。或は彼女たちの社会に

於ける義理というものであつたかも知れません。

こういった時、更に美佐子を開うという事は、経済的には易々たる事であつても、何んとかく気重で仕方がなかつたのです。先ず私の企画を実行に移してから万事きめよう。と、私は言を左右にしてはつきりした返事は躊躇してゐました。

「一度ボクの家へ来てみないか」

或る日、突然私はこう言い出しました。美佐子は私の真意を解せないという風に、大きな目を見ひらいて凝視しました。

(未完)

アルバム

(縛れた女の三十二態)

美しい縛しめ

第二集 説明

1、蠟淚(川端多奈子嬢) お尻の双丘を天井に向けた変つたポーズです。短いローソク二本、火をつけたまゝお尻にのせて蠟淚が流れてゐるところ等、まさに実感のこもつた一作。

2、量感(厚狭登江嬢) ムチムチと張

特別に変つたポーズで後手の手枷も上に高く掲げた両足の足枷も、胸に廻

した一本の縄によつて安定を得てゐるこれは横から狙つたものであるが、正面は又垂涎の眺めであることは論をま

たない。

4、ナイロン(雲井久子嬢) 全裸の肌に纏つた透明なナイロン布の美しさ、これで水をかけて撮影すると、極めて効果的である。

5、蒲団(雲井久子嬢) 後手の高手小手であるが、寢室の雰囲気が見る者をして、或る空想の世界へ誘わしめる。

6、陽を浴びて(村田那美子嬢) 野外に於ける大胆奔放なポーズである。両腕、両の乳房に喰い込んだ縄目、白日の下に晒された女体の美しさは縛られてゐるが故に更に顕著である。

7、立木縛り(村田那美子嬢) これも野外に於ける全裸の正面、松の木に立つて縛られたポーズで、右膝を曲げた羞恥の身となしは、天を仰いだ眼の表情と共にふるいつきたい魅力を漂している逸品。

8、鏡(雲井久子嬢) 後手の高手小手

と正面とを同時に見せようとして鏡を利用したもの、効果は疑問。

9、人間燈台(川端多奈子嬢) 仰向いた額に火のついたローソクを立てた苦心の作、動けば熱いローソクが目に入る。

10、足枷(村田那美子嬢) 大胆。

11、恍惚(村田那美子嬢) 野外。

12、磔(坂口利子嬢) 観念した眼差し乳房とお臍のポリウム。

13、蟹責(雲井久子嬢) これは一寸柔軟な身体の持主でないと出来ません。

14、前手縛り(高瀬忍嬢) 美麗。

15、後手(雲井久子嬢)

16、股間縛り(厚狭登江嬢)

17、椅子(杉美嬢)

18、逆立(川端多奈子嬢)

19、引廻し(村田那美子嬢)

20、たて縛り(中富綾子嬢)

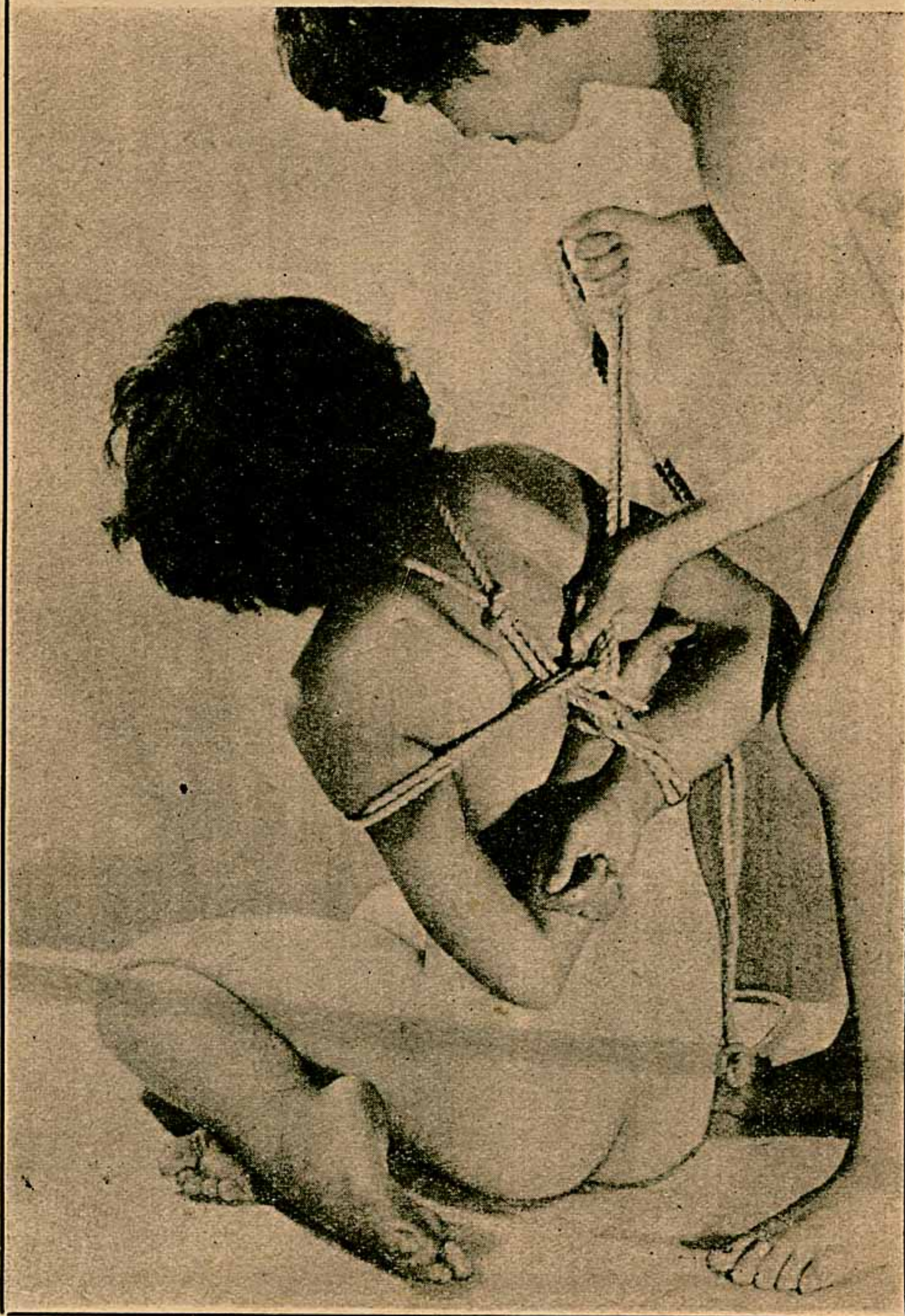
21、犬ぼえ(村田那美子嬢) 股間を通した縄が引き上げられて――。

22、逆エビ(村田那美子嬢) 幻想的なポーズで面白い。

23、吊あげ(杉美嬢) 全体重を二本の縄に托して吊り上げられる女体、表情姿態共に間然するところなき傑作。

アルバム、美しき縛しめ、 第二集
より

モデル
中 富 綾 子 嬢
村 田 聖 子 嬢



- 24、味覚(中富、村田三嬢)―左頁。
 25、足吊り(杉美華嬢)
 26、綱渡(中富綾子嬢)着衣。
 27、双丘(坂口利子嬢)紐によつて盛り上つた二つの乳房の美しさ。
 28、観念(中富綾子嬢)当年十七才の綾子嬢のあどけなさをよく表している股間縛り後手高手小手。
 29、人魚(杉、坂口、村田三嬢)三人のモデルによる群像。
 30、悦慶(同右)
 31、美声(杉美華嬢)
 32、溪間の妖精(村田那美子嬢)

【編集部便り】

○KK通信の購読会員が非常な勢で激増してゆくのは全く感謝し、又驚いています。昨年末、遅延を取りかえずに第十七号を発行したいと心掛けながら、年末年始と少々手順が狂いまして誠に申し訳なきこと乍ら、希望の達成は出来ませんでした。その中必ず追いつきたいと思つておりますから悪しからずお宥し下さい。

○大好評の二月号に引続いて倒錯の告白と手記の特集を盛り上げた三月号をお届けしました。口繪は二十四頁に増しましたのに、予定したものが入らず弱りました。読者の方々から貴重なコレクションを続々提供して下さい。そので変化のある豊富な口繪を盛り上げてゆける筈です。写真部の特写も新しいモデルを得て変つたものを企画中です。○吾妻新氏の麗筆で「海外サディズム雑話」と題して極めて興味のある現在の海外のサディズム事情の紹介をして頂きます。これは本誌読者の期待するに足る呼物の一つです。右に関連して今後口繪に外国のサド・マゾのフォトも豊富に紹介の予定です。

○滝、南川、都築、杉原の口繪陣に三月号から京都在住の貴繪画家数久操女史が健筆を振われることになりました。女史は「紐を沢山使うのは好みません。最少限度の紐で女体美を満喫しながら効果を充分に出したいのです」といつておられますが、本KK通信にも一二習作を書いて頂きました。四月号には最も奇抜なアイデアを提げて皆さま

にお目見えするそうです。これは雑誌発売迄は内緒ですが、このアイデアはきつと他でも真似するだろうと思ひます。それ程変つてゐるのです。

○古川裕子さんから告白「慟哭の記」(四十五枚)を寄せられました。これは四月号誌上を飾る予定です。

○読者案内欄は三月号誌上へ掲載しました。本誌K通の交流、或はどちらか一方にするか、今後の模様によつて決定したいと思ひます。

○本誌創刊七周年記念十万円懸賞の原稿募集に対しては陸続と大作が編集部の上に山積、目下構想中の方々も奮つて御送稿下さるよう期待します。

雑 報

○猿マネ根性は日本人の通有ながら、獨創性を尊ぶ出版界に於いて、なんでもかんでも本誌のやり方を真似する雑誌

誌が次々と出てくるのは、如何に本誌の企画が優秀であるかを証明しているようなもので、そういった雑誌が本誌を一流誌に祭り上げてくれているともいえる。

○断然他誌を圧倒して追隨を許さぬ本誌企画陣はその優位を更に決定的にするため、異常な努力を続けていたところ、今回本誌愛読者某氏が三十数年に亘つて蒐集にこれつとめたサド・マゾに関する膨大なコレクションを特に本誌のため快く提供して下さい。事になりましたので、本年は豊富な資料を以て皆様の御目を楽しませることが出来る筈。

○マゾヒスチックな実写写真を掲載以來「自分もあのような意気地なしとして、若い女に苛められてゐるところを撮つてほしい」という希望者が殺到何れ奇抜な写真が出来上ることでしょう

KK通信 第17号

昭和廿九年二月一日発行 (毎月一回一日発行)
 発行人 吉田 稔 編集人 箕田 京二
 発行所 大阪府堺区内菅原通四ノ三〇 曙書房
 定価 二十円 (振替口座大阪三四九五六番)